

記念講演

“ロータリーネッサンスへの夢”

元R I 理事・パストガバナー 末永直行

本日は貴クラブの創立10周年にお招きを受け、お話をさせていただくことになり、大変光栄に存じます。まずは創立10周年まことにおめでとうございます。創立から今日まで力を盡くしてこられた、多くの皆様方に心からの敬意を表する次第でございます。

10年という歳月を物事が誕生し、成長してゆく過程の中で位置づけますと、実は最初の10年こそがもっとも重要な単位であり、その歳月の過され方いかんが、それ以降の運命を決するとさえいってよいのではないかと思われます。

このことは人間の成長過程に於ける変化、成熟の期間でも明らかでございます。私は、ささやかな音楽学院と附属幼稚園を経営いたしておりますが、音楽に関して申しますと、幼児期の音感教育や、ピアノ、バイオリンなど器楽のレッスンに於ける、幼少年期の上達過程での10年の意味は大変なものでございます。これは、スポーツ各分野でも同様のことと存じます。

こうした意味をこめて、私は皆さまのクラブの10周年をことさら感銘深くお祝い申し上げたいのでございます。とくに私に印象深いものがございますのは、貴クラブが誕生した1983年6月3日という日は、不肖私がR I 理事を拝命し、国際協議会に出ていた日であり、私の所属する地区に、新クラブが誕生したということを知って、当時の向笠R I 会長はじめ全理事が拍手で祝福してくれた喜びを、きのうのことのようにはっきり覚えております。

さて「10年ひとむかし」と申しますが、10年前、1983年は、中曾根総理と、レーガン大



統領がロン、ヤス、の仲で日米運命共同体を強調、東京ディズニーランドがスタート、又、福岡では奥田革新県政が誕生した年でした。その後10年間、政治、経済、衣食、文化すべての事象が有為轉変、振り返って感慨一しおの思いでございます。当然、この世界に生きている人間の考え方、意識も大きく変化しました。

この内外の激動の期間、人びとの意識には、どんな変化がもたらされたでしょうか。NHKが行なっている“日本人の意識”調査をみても、その変化ははっきり読みとることができます。人々の生活目標、生き方の4つのパターンについて、73年の第1回調査から88年の第4回調査の15年間で、「身近な人たちと愛し合い、なごやかに暮らす」という“愛”指向が31%から39%へ8%も増加し、ついで「その日その日を自由に楽しくくらす」の“快”指向が21%から25%に。それに対して“利”指向が33%から29%へ。そして“正”指向は

14%から7%へと半減し、4つの価値観の中で、最小数値に転落いたしております。この4つの生き方の価値観のうち“愛”指向と“快”指向は“現在中心”、“正”指向と“利”指向は、“未来中心”とみることができますが、そうなると、この15年間で、“現在中心派”が52%から64%へと増加し、“未来中心派”が47%から36%へと減少したことになります。調査に参加した学者たちは、この変化は生活の豊かさに関係があるのではないか、とみております。そして経済の発展にともない、豊かであることが当然のことになった現在、社会正義を求めたり、長期的な見通しの中で生活設計を立てる、という生き方への共感が大きく減少したのは当然であろう、と見ております。

仕事中心の“働きバチ”から、ゆとりを大切にし、余暇を楽しむ生活への価値観の転換は、好ましい変化ではあるのですが、これが同時に、政治や社会への無関心度を増やすことにつながることになるとしたら、やはり気になります。

若者、とくに高学歴層の政治離れについて、青少年奉仕、あるいはローターアクト、インター アクトの領域で対応を考えるべき時期にきているように思うのでございます。

さて、人びとの意識の変化は「仕事と余暇」の考え方にもはっきりあらわれております。調査ではこの10年間で、仕事指向は44%から31%に、余暇指向は29%から34%に、仕事余暇両立指向が25%から32%。これで見る限り、現在の日本人は、けっして欧米から批判される、働き蜂ではありませんし、かといって、古い明治、大正人が、将来を悲観する必要もないのではないかと思うのでございます。とくに男性のみの数値で見ますと、仕事指向が38%、仕事、余暇両立が34%、余暇指向は27%と三項目の中で、もっとも低い数値となり、

働きバチでも、又、ナマケ者でもない、均衡のとれた勤労観が定着しつつあるように見えるのでございます。

さて、この調査の中から、もう一つのデータをご紹介いたします。

それは宗教、それもいわゆる「現世的利益的宗教」に関するものです。こういった宗教の存在は、さき頃の山崎浩子さんや桜田淳子さんといった、著名なスポーツ選手や俳優が話題を振りまいたことで、テレビや週刊誌で報ぜられました。旧来のいわば自己修養的宗教行動ではない「現世的利益的宗教行動」だけを行っている人が、この15年間、4回の調査で31、37、38、48%と確実に増加しており、特に25~35才の若い世代が多いということです。ただし、この中には祈願、お守り、お札を信じている、という人の数も含まれておりますが、若者の間に、とに角信者が増えている点が注目され、年令的には25才が59%と多く、次いで35才が53%、21才が51%と50%をこえ、あと世代が高くなるほど減ってゆき35才は40%、45才は34%、65才で26%という具合です。かつては人々を宗教に向かわせる三つの大きな悩みは、貧乏、病気、争い、だったといわれますが、現在、こうした悩みとは関係のなさそうな若者が、どうしてこうした現世宗教に走るのか。このことについて学者たちは次のように解説しております。即ち「経済合理性、効率性を最優先に考え、突っ走ってきた70年代から80年代の日本の社会は受験戦争、校内暴力やいじめ、家庭崩壊、非行など、若者を傷つける多くの歪みを生じさせている。同時に現代は生活の中に物だけがあふれている。精神的な充足への欲求を強くもつ若者たちは、不安やさびしさをいやすために現世宗教に走る、そして仲間から仲間へとそれが急速に伝播するのではないか」と。難しい問題ですが、この風潮もこの10年の間に顕

記念講演

在化してきた現象です。

元国土庁次官下河辺淳さんによれば「近世いらい日本には二つの大革命があって、一つは明治維新で、開国を迫られた日本人は懸命に欧米の文物をとり入れ、彼らの社会制度ばかりかライフスタイルまで模倣して、富国強兵を旗印に軍事大国への道をひた走った。第二の革命は敗戦と米国の一時的な日本占領である。焦土と化した国土の中にあって、まずどうやって家族を餓死させないか。ヤミ市には物がある。ヤミ市で物が買える金をどうやって手に入れるか。ただその一念で懸命に走りはじめた。この場合のお手本はマッカーサー司令部でつくられた占領政策でした。二つの革命とも、お手本は外国にあった。しかし大きな違いは、明治維新をなしとげた日本人には志があり、勇気と情熱があった。

敗戦後の日本人は、虚脱感からしばし立ち直れないでいた。頼りになるのは、結局お金だけ。そうして経済大国への道をひた走った。その競争では、いつの間にかトップに立っていた。」そして、下河辺さんは、それに対比して近世以降の世界の潮流について次のように解釈されております。「西欧にとって、近世の最大の革命といえば産業革命だろう。科学技術の進歩によって西欧各国の産業、工業社会は著しい発展を遂げたが、今、見直しが始まっている。世界は、今や新しいルネッサンスを必要としており、その方途を必死に求めはじめている、といってよい。そして、それは、経済価値偏重の経済大国日本がぶつかっている壁と多くの面で似ている。ともに“豊かな人間性、精神性”を失いつつあるところに根本的な要因がある。」と述べております。同感するところが多いのでご紹介いたしました。

ところで企業や組織にとって、この10年間とくに目立ったことは、それぞれにC Iに挑まれ、メセナやフィランソロピーへの傾斜を

強められたことではないでしょうか。私もごくささやかな財団法人をつくってメセナのまねごとのようなことをはじめましたが、私事ですが、もしロータリーの会員でなかったら、そのような生き方は思い立たなかつたかも知れません。経済大国日本も、この面ではまだまだ途上国です。国の文化予算の比率からみると、大ざっぱに見て、フランスやアメリカの $1/30$ 、計算の仕方によっては $1/50$ といったあります。しかもメセナ活動に対しても税金がかかります。フランスやアメリカでは、メセナ活動は売り上げおよび利益から控除され、一般管理費と同じ取り扱いです。とくにフランスでうらやましいのは、過去30年間、文化政策は一貫しており、ポンピドー大統領以来の歴代大統領は、その任期中に必ず文化的な偉大なプロジェクトを推進していることです。その代表的な例がポンピドーセンターであり、オルセー美術館であり、グラント・ルーブルであり、バスチーユのオペラ座です。国全体がメセナに大きく傾斜しているのです。フランスは福岡に九州日仏学館を設置しており、ルーヨ前館長は貴クラブの会員ですが、経済的にはきびしい国家財政の中から、こうした学館の運営維持に努めておられる姿は、いかにも文化国家としての誇りを感じさせ、うらやましく感じます。

企業のメセナ活動の進展は、ロータリーの奉仕活動とも、こんごいよいよ深い関連をもつことになることは確かであり、相互に協力すべき機会も増えてゆくように思われますので、とくに申し上げたのでございます。メセナやフィランソロピーとは別に従業員に“ボランティア休暇”をあたえて自由に、自発的に地域社会でボランティア活動をさせるという方式をとり入れている企業も出てまいりました。平成3年度の厚生白書も「広がりゆく福祉の担い手たち」というテーマを掲げて福

祉分野への市民参加を強く訴えています。現在活動中のボランティアは400万人ですが、20年後には1,200万人が必要とされております。また文部省では偏差値教育からの脱皮をはかる意味からも、高校入試の判定の尺度の中に「ボランティア活動」の実践をとり入れようとしております。全公立高校が定員の30%は推薦入試でとる宮崎県など「社会的ボランティア活動に、積極的に参加し、顕著な活動が認められるもの」という項目を推薦条件の中に掲げている高校もあるようです。

メセナといい、ボランティアといい、私たちのロータリーときわめて近いところで、一斉に社会の風潮が高まりつつあることを、しっかり認識し、対応しなくてはならない時期にきている、と思われます。ロータリーは長い歴史と実績と、世界的規模をもつ、誇るべき組織には違いないのですが、各方面で多様に展開されはじめた、メセナやボランティアの中で輪郭がぼやけ、存在価値自体が揺らぎかねないのではないか、と自戒しているのでございます。

最近、金子郁容という若い社会学者が書いた、岩波新書の「ボランティア」という本が、地味な内容にもかかわらず、静かなベストセラーになっております。著者はその中で、「ボランティア」といふと、困っている人を助けてあげることだ、と思っている人が多いのではないだろうか。ところが、実際にボランティアに楽しさを見出した人は、皆“助けられているのは、むしろ私の方だ”という感想をもつものだ。又、ボランティアをしていると、時には自分のはじめた、小さなことがきっかけとなって、思いもかけぬ展開が起こり、あとで振り返ってみると、自分1人では、とても出来なかつたことが可能になつてゐることを発見する」と、指摘しております。そして私はこのことばに大いに鼓舞されました。

そして同時に、私は思わず、シカゴで事務所を開いたばかりの青年弁護士、あのポール・ハリスのことを思い出します。シカゴは退廃をきわめ、まさに人間疎外の街でした。そんな環境の中で孤独なポールは、まず真に心を許せる友を求め、その友情のあたたかい絆をよりどころにして、地域社会への奉仕の灯をともしたのでした。ポール青年こそ、人を助けることが、そのまま自分を救うことに通ずることを、誰よりもよく知っていた人に違ひない、と思えてならないのでございます。

ロータリークラブの創立から、90年近い歳月が流れていますが、たった4人ではじまったひとつのクラブは、今日では187ヶ国に、26,261のクラブがあり、1,166,454人の会員を擁するまでに発展いたしました。世界も社会も大きく変化しております。ポールは「私たちは、けっして自己満足におちいるべきではないし、私たちの思想は硬化してはならない。ロータリーは、時代とともに変革させるべきものなのだ」と申しております。組織が急速に拡大するとともに、ロータリーの奉仕の形に、大きな変化がおこりました。

設立後間もなく起った、個人奉仕か集団奉仕か、という議論についての、有名な「決議23~34」や、77~78年理事会採択の3H運動の展開、87~88年度採択の「職業奉仕における新方針」などをめぐっての、この古い基本命題の論議については、御承知の通りですが、私は、もうその是非を問う時期はすぎた、と見ております。つまり今日では、ともにロータリーの奉仕にとって、必要な奉仕の形になっている、と思うのでございます。現に3Hプログラムは、偉大な成果を生んでおりますし、財團奨学金制度、研究グループ交換も、すっかり定着しております。御承知の通り故・平野特別代表はポリオプラス活動の地区委員長に、連続五期就任されて大きな実績を

記念講演

残されました。新家パストガバナーは、当地区にはじめて、ライラを創設された功労者でございます。

これだけロータリーの組織が全世界に展開され、そして奉仕のニーズが多様にかつ、大きくなつた世界では、個人奉仕の積み重ねだけでは、対応できない状況になってまいりました。しかし、かといって、かつていわれたように「個人の鉄砲の時代ではない、集団の大砲の時代だ」というような、集団奉仕の効果ばかりを偏重する考えには、私は大反対です。

たまたま、私の職業分類が音楽ということになっておりますので、あえて、わが田に水を引かせていただきましょう。ロータリアンを、みんな音楽家だと考えてみましょう。職業が違うように、演奏する楽器は皆違います。いろいろな弦楽器、木管、金管そして多くの打楽器、と皆さん的一人一人が、それぞれの楽器の演奏者なのでございます。そして、ソリストの皆さんには、曲によってはデュエット、トリオ、クワルテット、場合によっては、オーケストラのメンバーになります。しかし、室内楽やオーケストラ、という楽器はないのです。そして又、それぞれが、立派な演奏能力をもたなければ、けっしてよい合奏はできません。すべては、参加する個々の演奏家の技倆が基となるのでございます。私が、ロータリーの原点を大切にしつつ、と申し上げたのは、そのことでございます。集団にたよって自分一人ぐらい弾かなくとも、というメンバーがおりますと、それだけクラブのハーモニーは弱くなります。場合によっては何一つ音が聞こえなくなってしまう場合だって出てきます。皆さん的一人一人が音を出す、それも立派な音を出す。それが3Hプログラムのような大シンフォニーのハーモニーを生むのでございます。どうか個人奉仕か集団奉仕か、

を鉄砲や大砲に例えないで、ソロでプレイするのか、室内楽、あるいはオーケストラに参加するのか、という区別で考えていただきたいのでございます。

5年前のロイス・アビイ会長は「ロータリークラブでは80%の会員が眠っていて、20%の会員でクラブを支えている」と申しました。そうだとしたら、とても、よいシンフォニーを聞くことはできません。冒頭で申し上げましたように、貴クラブは、まだ初心を忘れず、しかも10年選手を中心に、編成されたオーケストラでございます。やや小型な編成ですが、すばらしい音色を響かせることで、つとに有名であります。しかも、地区内でもっとも安い入場料、つまり、メーキャップ代で聞かせて下さることで、演奏会場は常に超満員である、とうかがっております。いささか冗談めいたいい方になってしましましたが、まじめに貴クラブがこの10年、という記念すべきエポックを契機に、新しい世紀に向って“ロータリールネッサンス”的な名演奏をお聞かせくださいことを、心から祈念いたしましてお祝いのことばといたしたいと思います。

(一部要約させて頂きました)